文部科学省

平成２７年度総合的な教師力向上のための調査研究事業

成果報告書

実施テーマ：　教育課題に対応するための教員養成カリキュラム開発

調査研究主題：小学校での英語教育に対応できる英語運用能力育成のためのカリキュラム開発

安田女子大学

平成 28 年 3 月 31 日

目次

Ⅰ. 実施テーマと調査研究主題 …… 1

Ⅱ. 調査研究の背景と目的 …… 1

Ⅲ. 調査研究計画 …… 2
1．具体的な内容・取組方法 …… 2
2. 調査研究対象 …… 3
3. 実施機関と実施体制 …… 3

Ⅳ. 調査研究結果 …… 4
1. 実施日程 …… 4
2. 事前調査の結果 …… 4
（1）TOEIC® 模擬テスト …… 4
（2）アンケート調査 …… 5
3. 具体的な取組の結果 …… 10
（1）専門教育科目の履修 …… 10
①「児童英語教育法演習」（3 年生前期） …… 10
②「児童英語教育法」（2 年生後期） …… 11
（2）共通教育科目「英語リーディングⅠ・Ⅱ」の履修（2 年生前期・後期） …… 12
（3）Web 学習システムによる自主学習（2，3 年生） …… 13
（4）英語カフェの活用（2，3 年生） …… 14
（5）模擬留学（2，3 年生） …… 15
（6）海外教育語学研修（1～3 年生） …… 19
（7）TOEIC® 模擬テストの実施（事後テスト） …… 22
（8）事後アンケート調査の実施 …… 24
（9）先進的な英語教育を実践している小学校の視察 …… 28
（10）研究報告会への参加 …… 29

Ⅴ. まとめ …… 30

Ⅰ．実施テーマと調査研究主題

実施テーマ：教育課題に対応するための教員養成カリキュラム開発

調査研究主題：小学校での英語教育に対応できる英語運用能力育成のためのカリキュラム開発

Ⅱ．調査研究の背景と目的

急速なグローバル化の進展に伴い，小学校からの英語教育が我が国の教育政策とされ，平成 32 年度改訂予定の学習指導要領において小学校 5・6 学年に外国語科（英語）を新設，3・4 学年にも外国語活動が導入されることになっている。しかしながら，現行の小学校教員養成カリキュラムによって，その指導に対応できる教員を輩出できるとは考えにくい状況である。そのため，教員養成カリキュラムの検討が必要であるが，まずは教員養成課程に学ぶ学生の英語運用能力の育成を図ることが不可欠である。

このような状況の中で，小学校教員として外国語科（英語）及び外国語活動の指導に対応できるようにするため，本学児童教育学科では「英語のできる教員」の養成を目指して，学生の英語力向上の取組を進めてきた。平成 26 年度までの具体的な取組の内容は次の通りである。

・小学校教員希望学生を対象に「児童英語教育法」(2 学年，2 単位)，「児童英語教育法演習」(3 学年，1 単位）を開講している（平成 24 年度～)。

・児童教育学科に英語教育を専門とする教員を配置し，英語関係の授業（卒論ゼミ）担当をはじめ，日常的な英語学習の推進を実施している（平成 26 年度～)。

・学科独自の海外教育語学研修 (任意参加・カナダ 1 ヵ月間) を実施している (平成 26 年度～)。

これらの取組はまだ始まったばかりと言えるが，現在本学で学んでいる学生が平成 32 年度からの小学校英語の教科化・早期化に対応できるように本学でさらに実践できることを検討した結果，共通教育科目である英語科目の履修の必修化，オンライン学習システムによる自主学習の奨励，英語に慣れ親しむ環境整備として「英語カフェ」の活用の奨励，及び「模擬留学」を実施することとなった。

本調査研究は，本学科小学校コースの 2，3 年生を対象にこれらの取組を 1 年間実施するとともに，学生の英語運用に関わる意識及び知識・技能にどのような変化をもたらすかをアンケート調査及び英語熟達度テストによって質的・量的に明らかにする。そして，取組の一定の成果を検証することにより，小学校での英語教育に対応できる英語運用能力を育成することのできる小学校教員養成カリキュラム開発のための知見を得ることを目的とする。

なお，小学校での英語教育に対応できる英語運用能力の育成については，小学校英語教育において教師に求められる資質や能力に関する基礎的な研究を踏まえて本調査研究を展開することが理想ではある。しかしながら，平成 32 年度に改訂予定の学習指導要領の内容が明らかになっていない現状では，それらの資質・能力を定義することは困難であると言わざるを得ない。したがって，本調査研究は平成 32 年度からの小学校英語の指導内容を視野に入れながら，現行のカリキュラムの中での小学校教員養成のための英語力育成の最大の可能性を探るものであり，その際，単なる英語力向上プログラムとならないように配慮しながら取組を進めて行くこととした。

また，「英語運用能力」の定義についても，調査研究対象である学生にとって専門的な議論は不要であるため，いわゆる「英語力」と同義であり，その構成要素としてリスニング，スピーキング，リーディング，ライティングの 4 技能があるという共通認識で進めて行くこととした。そし

て，英語熟達度の測定・評価についてはそれらの４技能のうち受容技能であるリスニングとリーディングについてのみ TOEIC®模擬テストによって量的な測定を行うこととした。

Ⅲ．調査研究計画

１．具体的な内容・取組方法

次の（１）～（３）の３つの内容について，①～⑩の取組を次のような方法によって行う。

（１）学生の英語学習及び外国語活動を担当することに対してのモティベーションの向上を図りながら英語運用能力の向上をめざすための取組として，①～⑥を実施する。

①専門教育科目の履修

「児童英語教育法」（2 年生後期）と「児童英語教育法演習」（3 年生前期）を必修科目として学科専任教員が担当し，指導する。

②共通教育科目「英語リーディングⅠ・Ⅱ」の履修（2 年生前期・後期）

共通教育科目である「英語リーディングⅠ・Ⅱ」を必修科目として学科専任教員が担当し，指導する。

③Web 学習システムによる自主学習（2，3 年生）

e ラーニング用パッケージソフトの一つである Moodle に Web 学習システムを構築し，オンラインでの自主学習を奨励し，その取組状況を把握する。

④英語カフェの活用（2，3 年生）

本学に設置されている英語カフェの利用を奨励し，正規のカリキュラム以外でも気軽に英語に触れる機会を設ける。

⑤模擬留学（2，3 年生）

参加希望学生を対象に夏休みを利用して１泊２日の英語合宿を実施し，外国人講師との英語でのコミュニケーションやパフォーマンスを集中的に行い，英語使用の機会を提供する。

⑥海外教育語学研修（1～3 年生）

参加希望学生を対象に平成 28 年 2 月の約 1 か月間，カナダのビクトリアにてホームステイをしながらビクトリア大学において短期留学を実施する。

（２）以上①～⑥の取組の前後での変容を測定・分析するための取組として⑦，⑧を実施する。

⑦TOEIC®模擬テストの実施（事前，事後）

英語熟達度テストとして TOEIC®模擬テストの一つである TOEIC®模試トレ（サイバーユニバーシティ株式会社）を事前と事後に実施し，研究対象学生の英語運用能力のうちリスニング力とリーディング力の変容を測定する。

⑧アンケート調査の実施（事前，事後）

上記取組③，④についての利用状況の把握や，全ての取組を通しての情意面・態度面の変容を把握するためにアンケート調査を実施し，調査研究対象学生全員について英語や外国語活動に対する意識の変容を調査分析する。なお，当初は事後調査のみを計画していたが，学生実態を踏まえて取組を行うとともに，より正確に事前・事後の変容を検証することができるように事前調査も実施することとした。

（３）平成 32 年度からの小学校英語の教科化・早期化を視野に入れて最新の情報を得ながら調査研究事業を進めていくための取組として，⑨と⑩を実施する。

⑨先進的な英語教育を実践している小学校の視察

先進的な英語教育を実践している小学校を視察し，授業参観と研究協議を通して情報交換を行う。

⑩研究報告会への参加

当初の計画にはなかったが，小学校英語教育を取り巻く最新の情報を入手するために有益な研究報告会があれば参加し，本調査研究の充実を図ることとする。

２．調査研究対象[1]

安田女子大学教育学部児童教育学科　2 年生小学校コース　53 名（50 名*）
3 年生小学校コース　59 名（53 名*）
海外教育語学研修参加者　29 名（29 名*）

*（　）内の数字は事前・事後の TOEIC®模擬テストとアンケート調査すべての完全なデータを得られた人数。

３．実施機関と実施体制

（１）実施機関：安田女子大学

１）代表者　学長　瀬山敏雄

２）事業実施責任者　教育学部児童教育学科　学科長　徳永隆治

３）事務連絡担当者　事務部庶務課　松下愛花

４）小学校教員養成に関する実績

安田女子大学児童教育学科は 1975 年の設立以来 41 年の歴史の中で 4,380 名の卒業生を送り出すとともに，広島県内では 1,430 名以上の小学校教諭（正採用）を輩出し，広島県の小学校教員養成において中心的な役割を果たしている。毎年の入学者 120～130 名のうち，半数弱の 50～60 名が小学校教員を志望しており（それ以外は大半が幼稚園教諭と保育士を志望），小学校教諭一種免許状と幼稚園教諭一種免許状を取得し，公立小学校教員採用試験の受験者に対する現役合格率は 80%前後である。現役不合格者も臨時的任用等を経て 1～2 年後には採用試験に合格し，ほぼ全員が正採用となっている。

（２）実施体制

所属部署・職名	氏名	役割分担
教育学部児童教育学科　学科長	徳永隆治	全体統括・調整
教育学部児童教育学科　准教授	田辺尚子	具体的な内容・取組方法の①～⑩
教育学部児童教育学科　教授	橋本正継	具体的な内容・取組方法の⑥
教育学部児童教育学科　准教授	永田彰子	具体的な内容・取組方法の⑦

[1] 調査研究対象に 1 年生を含まないのは、本学科では 2 年生から小学校コースと幼保コースに分かれるからであり、4 年生を含まないのは、4 年生には該当する授業がないからである。

Ⅳ．調査研究結果

１．実施日程

事業項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①専門教育科目の履修												
A：児童英語教育法演習（3年生）	←	A		→								
B：児童英語教育法（2年生）							←	B		→		
②共通教育科目「英語リーディングⅠ・Ⅱ」の履修（2年生）	←	Ⅰ		→			←	Ⅱ		→		
③Web 学習システムによる自主学習（2，3年生）				←						→		
④英語カフェの活用（2，3年生）			←							→		
⑤模擬留学（2，3年生）					↔							
⑥海外教育語学研修（1～3年生）											↔	
⑦TOEIC®模擬テストの実施（2，3年生：事前，事後）		●								●		
⑧アンケート調査の実施（2，3年生：事前，事後）		●								●		
⑨先進的な英語教育を実践している小学校の視察（2校）										↔		
⑩研究報告会への参加											●	

２．事前調査の結果

（１）TOEIC®模擬テスト

１）実施内容

TOEIC®模試トレ（サイバーユニバーシティ株式会社）を2，3年生を対象として事前テストとして5月に実施した。このテストは，リスニング（100点）とリーディング（100点）の問題合計50問（200点）を50分間でウェブ上で解答するTOEICの模擬テストであり，TOEIC予測スコア（学生には合計点のみ表示）の相関係数は0.87である。短時間で2つの技能を測定することができ，解答終了と同時に得点がわかるという利便性も考慮し，熟達度テストとして採用した。ただし，テストを体験した後の学生の感想として，各問題の解答制限時間が決まっており，パソコンの画面上に解答時間が減っていくのが表示され，制限時間が終了すると解答していなくても次の問題に進んでしまうため，特にリーディングにおいて自分のペースで解答できなかったり，ストレスを感じたりするという声が多数聞かれた。紙ではなくパソコン上で解答すること以外にも正規のTOEICとの相違点があると言える。

２）結果と考察

調査研究対象者の中から欠席者やデータに欠損のあった者を除き，2年生50名と3年生53名の平均点を表1に，得点分布を図1に示す。表1から2年生の平均点は404点，3年生

は 411 点でほとんど同じであり[2]，リスニングとリーディングの得点差もほとんどないことがわかる。また，図 1 から 2，3 年生ともに同じような山型の得点分布をしていることがわかるが，300 点未満の学生が数名存在していることから本調査研究事業の取組についていけないと感じる学生が出ることが推測できる。

表 1．TOEIC® 模試トレの平均点（事前テスト）

	リスニング	リーディング	合計
2 年生(n = 50)	206	198	404
3 年生(n = 53)	208	203	411

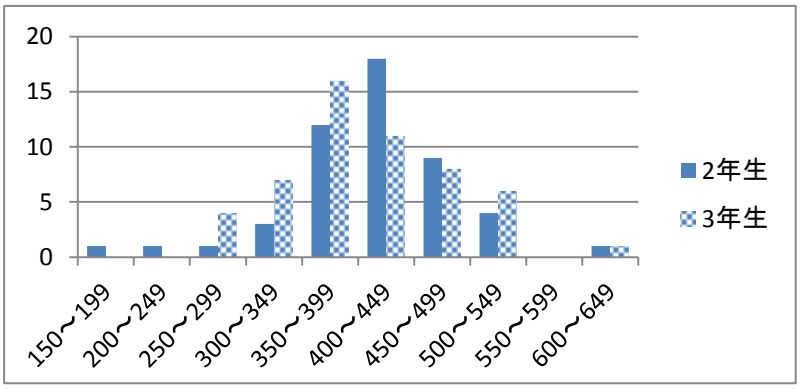

図 1．TOEIC® 模試トレの得点分布（事前テスト）

（2）アンケート調査

A．英語に関する意識や経験の調査

①英語に対する印象

図 2 から全体では半数弱の 43.7%が英語に対して肯定的評価（「好き」と「とても好き」）をしていることがわかった。一方，2 年生では肯定的評価と否定的評価（「嫌い」と「とても嫌い」）が同数の 18 名（36.0%）存在しており，好き，嫌い，どちらでもないに 3 分するとそれぞれ 3 分の 1 ずつの割合であると言える。また，3 年生では肯定的評価が 29 名（54.7%）で否定的評価の 11 名（20.8%）を大きく上回っており，2 年生は 3 年生ほど英語に対して好意的ではないことがわかった。

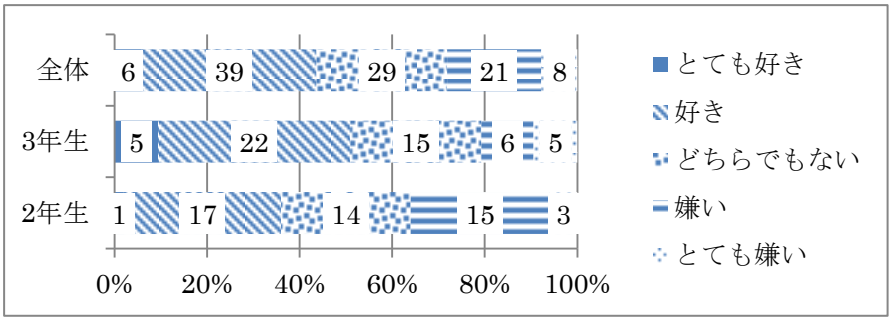

図 2．英語に対する印象（事前調査）

[2] 国際ビジネスコミュニケーション協会（2015）によると，2014 年度 TOEIC IP テストの結果において，教育・教養系の大学生の平均点は 429 点（内訳：1 年生 425 点，2 年生 421 点，3 年生 458 点，4 年生 540 点）であった。

②英語に対する不安

図３から２年生，３年生ともに約 53%が「とても不安」と答えており，「少し不安」とあわせるとどちらの学年も 92.2%の学生が英語に対して不安を感じていることがわかった。したがって，本調査研究事業の取組に対してもその不安のために参加を望まないことも十分考えられるため，不安を取り除くような配慮や工夫が必要である。

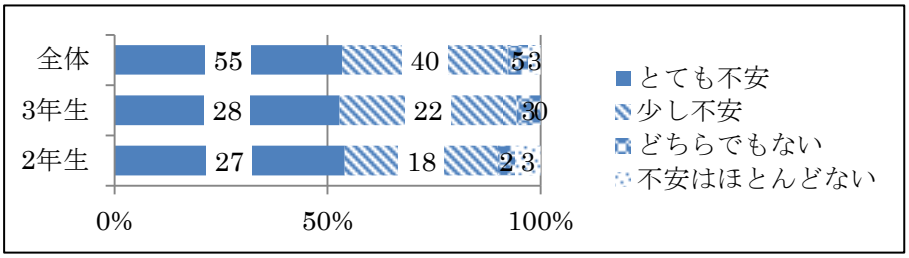

図３．英語に対する不安（事前調査）

③海外経験の有無

外国での異文化体験の有無を調査したところ，２年生の 40%，３年生の 53%が「ある」と回答した（図４）。国名はアメリカ，カナダ，韓国などが多く，英語使用の程度はわからないが，全体では約半数の調査協力者が異文化体験があることがわかった。

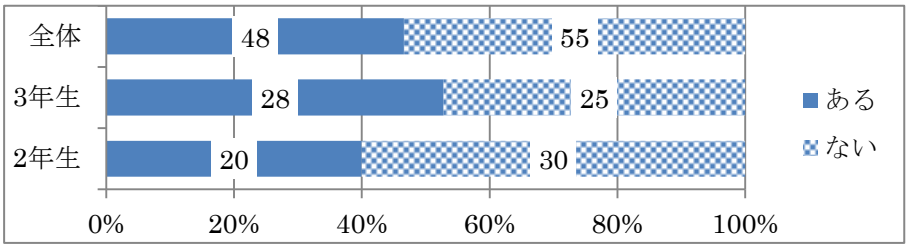

図４．海外経験の有無

④小学校時代の英語学習経験

調査研究対象者が小学生のときには外国語活動は必修ではなかったため，小学校時代の英語学習の経験を明らかにするために，小学校と英会話学校に分けて英語の学習経験を尋ねた。全体では 80%弱が小学校での英語学習を経験しており，英会話学校だけも含めると 80%が小学校時代に英語学習経験があることがわかった（図５）。

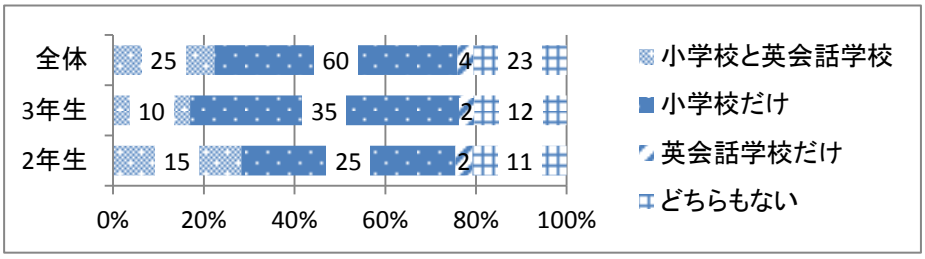

図５．小学校時代の英語学習経験

⑤英語に対する思いについての自由記述

調査研究対象者の英語に対する思いをさらに詳しく分析するために自由記述欄を設け，その分析として計量テキスト分析のためのソフトウェアである KHcoder（樋口，2004）[3]を用いてテキストマイニングによる分析を行った。この質問項目に対する 100 名の回答のうち，6 名以上の回答に出現した語が 25 語あった。その 25 語について Ward 法による階層的クラスター分析を行った。クラスター結合水準の変化，および解釈のしやすさに基づき，5 クラスターに分類した（表２）。

各クラスターを代表する語や対応する自由記述からは，「小学校時代の英語の授業の楽しさ」を経験した学生が多いことがわかるが，同時に「中学または高校時代の英語の難しさ」から英語が嫌いになった学生も多いことがわかる。また，「英語は好きだが文法や単語は苦手」「発音に対する不安」「強い苦手意識」の 3 つのクラスターからは英語に対する否定的な思いの対象として「文法」「単語」「発音」があることが明らかとなり，それらが苦手意識や不安を生じさせていると考えられる。

表２．英語に対する思いについての自由記述に出現した語のクラスター分析

クラスター	含まれる主な語	対応する実際の回答例
小学校時代の英語の授業の楽しさ	小学校，楽しい	・小学校の授業で ALT の先生とお話しするのはとても楽しかったです。
英語は好きだが文法や単語は苦手	英語，好き，文法，単語	・英語は好きだけど座学でやる文法とかは苦手。 ・コミュニケーションをとるのは好きですが文法や単語が苦手です。
発音に対する不安	発音，不安	・発音が苦手で不安です。
中学または高校時代の英語の難しさ	高校，中学，難しい	・中学までは好きだったが高校で難しくなると付いて行けず苦手になり嫌いと思うまでになってしまった。
強い苦手意識	強い，意識，苦手	・とても苦手意識が強いです。

B．外国語活動に関する意識調査

①外国語活動に対する印象

調査研究対象者が外国語活動に関してどのような意識をもっているかを調査するために名畑目（2014）[4]を参考にして 5 件法（1：全くそう思わない，2：そう思わない，3：どちらともいえない，4：そう思う，5：とてもそう思う）で回答するアンケート調査を実施した。表３からは，2 年生，3 年生ともに共通して小学校で外国語活動を担当することへの不安（項目 4）は高いが，外国語活動の必要性（項目 3）も感じていることがわかる。また，外国語活動の目標・目的の理解（項目 1）や指導内容の理解（項目 2）については，2 年生は「児童英語教育法」を未履修のため低い数値であるが，履修後の 3 年生では数値が上がっていることがわかる。

[3] 樋口耕一．(2004).「テキスト型データの計量的分析—2 つのアプローチの峻別と統合」『理論と方法』19, 101-115, 数理社会学会.

[4] 名畑目真吾．(2014).「小学校教員を志望する大学生の英語活動に関する意識調査」．*JES Journal*, *14*:131-146.

表３．【外国語活動に対する印象】の評定値の平均と標準偏差

		2 年生(n = 50)		3 年生(n = 53)	
		M	*SD*	*M*	*SD*
1	小学校外国語活動の目標・目的の理解	2.70	0.96	3.76	0.78
2	小学校外国語活動における指導内容の理解	2.18	0.82	3.52	0.88
3	小学校における外国語活動の必要性	4.20	0.66	4.48	0.64
4	小学校で外国語活動を担当することの不安	4.22	1.01	4.48	0.87
5	小学校で外国語活動を担当することの楽しみ	3.14	1.18	3.02	1.03
6	小学校で外国語活動を担当したくない気持ち	2.80	1.04	3.28	1.05

②外国語活動の実践に必要な能力や資質

調査研究対象者が外国語活動の実践にはどのような能力や資質が必要だと考えているかを調査するために 5 件法で尋ねた結果を表 4 に示す。全ての項目に対して肯定的評価であったが，最も高い評価項目は 2，3 年生に共通してスピーキング力（項目 4），正しく発音できる力（項目 5），教員のコミュニケーション能力や態度（項目 7）であった。したがって，大学での授業においてもこれらの項目について学びたいと思っていると推測できる。

表４．【外国語活動の実践に必要な能力や資質】の評定値の平均

		2 年生(n = 50)		3 年生(n = 53)	
		M	*SD*	*M*	*SD*
1	教員のリーディング力	4.54	0.57	4.04	0.80
2	教員のリスニング力	4.66	0.51	4.34	0.61
3	教員のライティング力	4.44	0.70	4.02	0.74
4	教員のスピーキング力	4.84	0.42	4.79	0.41
5	教員の正しく発音できる力	4.82	0.38	4.85	0.36
6	教員の語彙力	4.44	0.64	4.60	0.53
7	教員のコミュニケーション能力や態度	4.84	0.37	4.79	0.45
8	教員の異文化に対する理解や知識	4.44	0.64	4.55	0.53
9	教員の早期英語教育に関する知識	4.36	0.77	4.21	0.65
10	ALT（外国語指導助手）との協力	4.60	0.53	4.53	0.60
11	中学校（の英語授業）との連携・協力	4.14	0.94	4.11	0.57

③外国語活動を行うために特に必要だと思うことについての自由記述

外国語活動の実践に必要な能力や資質についての調査研究対象者の思いをさらに詳しく分析するために，「外国語活動を行うために特に必要だと思うこととその理由」について自由記述欄を設けたところ 100 名の回答があり，そのうち 6 名以上の回答に出現した語が 40 語あった。その 40 語について Ward 法による階層的クラスター分析を行った。クラスター結合水準の変化，および解釈のしやすさに基づき，6 クラスターに分類した（表５）。各クラスターを代表する語や対応する自由記述からは，アンケートの項目 4，5 と同じ回

答である「スピーキング力と正しい発音」，項目 7，10 と同じ回答である「積極的にコミュニケーションを図る態度と ALT とのコミュニケーション」というクラスターが抽出されたが，それらの項目の評定値の平均が比較的に高いことと一致する。それら以外のクラスターのうち，「児童に英語を聞かせること」「授業で教えるための英語の知識」はアンケートの項目よりも具体的な内容を回答したものであり，「児童英語教育法」を履修済みの 3 年生の回答に多く見られた。そして，最も出現回数が多かったクラスターは「子どもが英語を楽しいと思えるようにすること」であった。このことは，もう一つのクラスターである「子どもに苦手意識を持たせないこと」とあわせて，学生たちは教員の側からの視点（例えば，教員のスピーキング力やコミュニケーション能力）以上に，子どもの視点から外国語活動を捉えようとする傾向が高いことがわかった。

表５．小学校英語活動を行うために特に必要だと思うことについての自由記述に出現した語のクラスター分析

クラスター	含まれる主な語	対応する実際の回答例
子どもに苦手意識を持たせないこと	持つ，意識，苦手	・子どもたちが英語に対して楽しいイメージが持てるようにすること。あまりいいイメージがなかったり苦手意識を持ってしまうと英語を進んで勉強しようと思わなくなるから。
積極的にコミュニケーションを図る態度と ALT とのコミュニケーション	コミュニケーション，話す，積極，態度，ALT	・教員が積極的にコミュニケーションを図る態度を見せていかないと児童も積極的にコミュニケーションを図っていけないと思うからコミュニケーション能力が必要だと思う。 ・ALT と先生のコミュニケーション。
スピーキング力と正しい発音	発音，正しい，スピーキング	・スピーキング力と発音を正しくできることは必要不可欠であると思う。子どもは耳で覚えることになるのでこの 2 つの力は欠かせない。
児童に英語を聞かせること	児童，リスニング，聞く，慣れ親しむ	・リスニングなどで児童にどれほど聞かせるかが大切。慣れ親しませるため。
授業で教えるための英語の知識	教員，教える，授業，知識	・教員が英語について深く学ぶことが必要だと思う。どの教科においてもだが，子どもたちに教えるにはその何倍もの技術や知識がいると思うから。
子どもが英語を楽しいと思えるようにすること	英語，必要，子ども，楽しい	・子どもが英語を楽しいと思えるようにすること。楽しくなければなかなか自分のものとして考えられず身につかないことも多いから。

【事前調査のまとめ】

・TOEIC®模試トレの平均点は，2 年生 404 点，3 年生 411 点でほとんど差はなく，リスニングとリーディングの得点差もほとんどなかった。
・全体の 43.7%が英語が好きと答えているが，2 年生では好き，嫌い，どちらでもないがそれ

ぞれ 3 分の 1 ずつの割合であるのに対し，3 年生では好き（54.7%）が嫌い（20.8%）を大きく上回り，2 年生は 3 年生ほど英語に対して好意的でない。
・2 年生，3 年生ともに 92.2%が英語に対して不安を感じており，「とても不安」と答えた学生が半数（約 53%）を占めていた。
・英語に対する苦手意識や不安の要因としては，文法，単語，発音が挙げられる。
・全体の約半数が海外経験があり，約 80%が小学校時代に英語学習の経験がある。
・2 年生，3 年生ともに共通して小学校で外国語活動を担当することへの不安がとても大きく，同時に外国語活動の必要性も高く評価していた。
・外国語活動に必要な能力や資質については，2，3 年生に共通して，スピーキング力，正しく発音できる力，教員のコミュニケーション能力や態度を最も高く評価していた。また，「子どもが英語を楽しいと思えるようにすること」「子どもに苦手意識を持たせないこと」が大切だと考えていた。

３．具体的な取組の結果

（１）専門教育科目の履修

①「児童英語教育法演習」（3 年生前期）

１）実施内容

必修科目として 2 クラス編成（1 クラス約 30 名）で学科専任教員が担当し，履修学生全員が単独での模擬授業を行った。2 年次後期に『小学校英語教育法入門』（大修館）のテキストを一通り学習し，学習指導案の作成も行っていることを踏まえて，文部科学省作成の共通教材である *Hi, friends! 1, 2* の各レッスンを 3 名のグループに割り振った。そして，グループで 45 分授業の指導案を作成し，一人 15 分ずつ担当して他の学生を児童役に見立てて単独授業を行った。模擬授業の後には研究協議を行い，続いて教員からの指導と発音演習を行った。授業者の学生は，児童役の学生からのフィードバックシートも参考にしながら模擬授業レポートを作成して内省を行った。また，最後の授業において *Hi, friends! 1, 2* に出てくるすべての英単語を一覧表にして再度発音演習を行い，発音の不安を軽減できるようにした。

２）アンケート調査の結果と示唆

前期の授業であったため，授業終了後半年経った 1 月に事後アンケート調査を行い，5 件法（1：全くそう思わない，2：そう思わない，3：どちらともいえない，4：そう思う，5：とてもそう思う）で尋ねた結果（表 11）によると，「小学校英語教育に対する意識（考え，意欲・関心など）の向上に効果があった」（$M = 4.42$, $SD = 0.69$）と「小学校英語教育に対する知識（英語教育法，外国語活動指導法など）の向上に効果があった」（$M = 4.23$, $SD = 0.70$）は高い評価であった。一方で，「小学校英語教育に対する技能（授業力，英語運用能力）の向上に効果があった」（$M = 3.79$, $SD = 0.88$）はあまり高い評価ではなかった。実際に単独で模擬授業を行ったという点では「技能の向上」がもっと高い評価であるべきかもしれないが，15 分の模擬授業を 1 回経験しただけという点では経験量がまだ十分ではなかったと思われる。さらに自由記述の回答例からも，わずか 15 分でも実際に経験したからこそ，「意識」と「知識」の面での効果をより高く実感することができたと考えられる。また，この授業以

後は英語に関連する授業がないことを不安に思う意見もあった。

【自由記述の回答例】　＜意識＞＜知識＞＜技能＞は筆者による分類

・英語を教える時代が近づいていることを身に染みて感じた。自分の英語力のなさを痛感できて本当によかった。もっと勉強します。＜意識＞
・今後英語の授業がないことを考慮してくださって教材を提供していただきありがたかった。英語に今までより興味を持つことができるようになった。英語の勉強を続けて頑張りたい。＜意識＞
・3 年後期以降も授業で英語と関わる時間があればいいと思った。＜意識＞
・英語の授業の仕方などを学べたり，実際にやってみたりして英語学習について理解を深めることができた。＜知識＞
・現場と学術的な内容を合わせて教えていただいてわかりやすかった。＜知識＞
・模擬授業で実践力をつけることができた。模擬授業は充実していた。＜技能＞
・発音の指導が実践的，効果的でよかった。（類似の回答多数）＜技能＞

【「児童英語教育法演習」のまとめ】

・成果としては，小学校英語教育に対する意識（考え，意欲・関心など）と知識（英語教育法，外国語活動指導法など）の向上について効果があった。また，発音指導が好評であった。
・課題としては，わずか 15 分の単独授業だったこともあり，小学校英語教育に対する技能（授業力，英語運用能力）の向上についての効果は弱い肯定的評価に留まったが，短時間でも実際に経験したからこそ，意識や知識面での評価が高くなったと考えられる。

②「児童英語教育法」（2 年生後期）

1）実施内容

必修科目として英語英米文学科の履修希望学生と合同の 1 クラス編成（68 名）で学科専任教員が担当し，『小学校英語教育法入門』のテキストを使って第二言語習得や外国語活動に関する理論を学習した後に，*Hi, friends! 1* を使って学習指導案の作成を行った。理論だけでは学生の興味関心をかき立てることがことが困難であると考え，実際の授業の DVD を鑑賞したり，*Hi, friends!1, 2* の CD を活用しながら授業を再現してみせたりして，できるだけ実際的・具体的な指導を取り入れた。また，英語学習への動機づけを兼ねて，授業の終わりの 10 分間は英語の童謡を毎回 1 曲ずつ振付をつけて歌い，発音指導も行った。

2）アンケート調査の結果と考察

事後アンケート調査の結果（表 14）によると，①の「児童英語教育法演習」と同様に，「小学校英語教育に対する意識の向上に効果があった」（$M = 4.26$, $SD = 0.56$）と「小学校英語教育に対する知識の向上に効果があった」（$M = 4.18$, $SD = 0.62$）は高い評価であった。一方で，「小学校英語教育に対する技能の向上に効果があった」（$M = 3.74$, $SD = 0.77$）はあまり高い評価ではなかった。理論中心の授業内容であったため当然の結果と言えるが，自由記述の回答例からは発音や英語の歌については実践力として高く評価していた。

【自由記述の回答例】　　＜意識＞＜知識＞＜技能＞は筆者による分類

・英語についての見方や考え方が少し変わった。ありがとうございました。＜意識＞
・子どもに教える立場というのを考えると意欲が出てきた。指導案作成などからどうやって教えていけばいいのかわかってきたが，模擬授業をしたわけではないのでまだまだのところがある。＜意識＞＜知識＞
・指導案を実際に書くことで授業の全体像や進め方などがよくわかった。＜知識＞
・小学校での英語教育にそなえるためにはやはり発音をする必要があると思う。今回，この授業でそのような機会が多くあったためたくさん学ぶことができた。＜知識＞＜技能＞
・発音のしかた，英語の歌を学べてよかった。とても楽しかった。（類似の回答多数）＜技能＞

【「児童英語教育法」のまとめ】

・成果としては，小学校英語教育に対する意識（考え，意欲・関心など）と知識（英語教育法，外国語活動指導法など）の向上について効果があった。
・課題としては，小学校英語教育に対する技能（授業力，英語運用能力）については重点を置かない授業内容だったため弱い肯定的評価に留まったが，発音演習と英語の歌の実践については非常に高い評価であった。

（２）共通教育科目「英語リーディングⅠ・Ⅱ」の履修（2 年生前期・後期）

１）実施内容

共通教育科目である「英語リーディングⅠ・Ⅱ」を学科の履修指導により必修科目とし，専任教員が担当して児童教育学科の学生のみのクラス編成（1 クラス約 27 名）で 1 年間を通して指導した。しかし，共通教育科目であることからテキストは全学共通の *Reading Fusion 1*（南雲堂）を使用し，共通シラバスに沿って指導した。TOEIC®模擬テストの事前テストにより受講学生の平均点は 411 点で約 80%が 350～499 点に集中していることから，基礎力養成のために語彙力と文法力を補強しながら，初～中級レベルで速読して概要をつかむことができるリーディング力の育成をめざした。同時に，2 年生は英語が好きな学生が 3 分の 1 しかいないことも考慮し，小学校英語とのつながりを少しでももたせて動機づけを図るために，音読を含む発音指導を毎回行い，児童教育学科の学生の興味関心に合う教材として英語の絵本を活用した指導も 1 回取り入れた。

２）アンケート調査の結果と考察

事後アンケート調査の結果（表 14）によると，「小学校英語教育に対する意識の向上に効果があった」（$M = 3.66$, $SD = 0.79$），「小学校英語教育に対する知識の向上に効果があった」（$M = 3.70$, $SD = 0.85$），「小学校英語教育に対する技能の向上に効果があった」（$M = 3.62$, $SD = 0.87$）のすべてにおいて弱い肯定的評価であった。ただし，前期末と後期末に行った授業評価アンケートにおける授業満足度は 5 件法で 4.5～4.8 であり，授業に対しては一定の肯定的評価を得ていた。自由記述の回答例からは，学科の履修指導により必修となったことに対する不満や，小学校英語とのかかわりが見いだせず，勉強する必要性を感じられない気持ち，基礎的な英語力がないために授業についていけない気持ちを指摘することができる。

TOEIC で得点できるような長文読解力（いわゆるリーディング力）は小学校で英語を教える教員には必要ないとは言い切れないが，他の授業で模擬授業の準備等に追われている学生で特に英語力が低い学生にとっては，一般的なリーディング力を育成する授業に対する動機づけは極めて低いということは事実である。前述の表３から学生は小学校で英語を教えるために最も必要な英語力は発音を含むスピーキング力だと考えているので，小林（2010:35）[5]が主張するように「英語運用能力養成の科目も既設の一般英語の科目を充てるのではなく，小学校外国語活動に特化したものを提供し，身近な単語を熟知させるような練習を含める」ような取組が学生のニーズには合っていると考えられる。また，回答例からも授業で英語に触れることができることは評価されていると考えられるので，TOEIC 対策のリーディングの内容を外国語活動に特化したものに変更することによって学生の評価が高くなることが十分期待できる。

【自由記述の回答例】　　＜意識＞＜知識＞＜技能＞は筆者による分類

・長文読解の仕方がわかって速く読めるようになった。＜技能＞
・速読テストがとても力になった。速読の力がついたように感じる。（類似の回答多数）＜技能＞
・TOEIC の点は上がらなかったが，この授業がなければ下がっていたと思う。＜技能＞
・毎回の音読をきちんとすることで TOEIC®模擬のリスニングが前回よりできた。＜技能＞
・強制されていたので自分の中で「仕方なく」勉強しているという気持ちが消えなかった。しかし，前から読み進めていくという長文読解の方法は少し身についたのではないかと思った。絵本を読む活動は楽しかった。＜意識＞＜技能＞
・内容や単語が難しすぎて英語力をつける勉強にはならなかった。＜意識＞＜技能＞
・自分にはレベルが高すぎてついていくのでやっとだった。小学校英語として役に立つのかはよくわからないし，あまりかかわりがないように感じた。（類似の回答複数）＜意識＞
・英語に触れあう時間が持てたことはよかった。＜意識＞

【「リーディングⅠ・Ⅱ」のまとめ】

・成果としては，長文読解や速読の力がついたと回答した学生が多かった。
・課題としては，共通教育科目のため共通テキストを使用しなければならず，小学校英語とのかかわりを見いだせず勉強する必要性を感じられなかったり，レベルが高すぎてついていけないと感じた学生も多かった。英語の授業があることに対しては評価していると考えられるので，外国語活動に特化した内容に変更することによって改善が期待される。

（３）Web 学習システムによる自主学習（2，3 年生）

１）実施内容

eラーニング用パッケージソフトの一つである Moodle に『SUCCESSFUL KEYS TO THE TOEIC® TEST 1 3rd Edition』（桐原書店）を活用して Web 学習システムを構築し，テキストを配布してオンラインでの自主学習を奨励した。学生は Moodle や Web 学習についての

[5] 小林美代子．(2010).「これからの小学校教員養成はどう変わるのか」『英語教育』58(12), 34-35. 東京：大修館書店.

経験や知識がなかったため前期の終わりに Lesson 1 のみ授業形式で指導し，授業のように 1 週間に 1 レッスン取組むことを奨励し，その後は自主学習とした。学生の中にはインターネットにつながったパソコンが家にない学生もいたので，その場合には学内に常設されている情報教室を利用するように指導した。

２）アンケート調査の結果と考察

自主的に取組んだ学生は全体の 27.2%にあたる 28 名（2 年生 16 名，3 年生 12 名）で回数は 1~3 回（平均 1.4 回）であった。英語運用能力の向上に効果があったかを 5 件法（1：全くそう思わない，2：そう思わない，3：どちらともいえない，4：そう思う，5：とてもそう思う）で尋ねたところ（表 13），$M = 3.36$ ($SD = 1.08$)であり，「効果があった」とまでは思わなかったことになる。

また，全く取組まなかった理由も尋ねたところ，「時間がなかった」が 41 名と最も多く，次いで「忙しくて忘れていた」が 11 名であった。実際に，2 年生は後期から模擬授業を行う授業が多くあり，数少ない空きコマはグループでの模擬授業の準備に追われ，一方，3 年生は後期に小学校での母校実習（4 週間）があったため，その前後を含めて忙しかったことは事実である。それら以外の理由としては，「英語が苦手なのでやってもわからない」「TOEIC の勉強をする気にはならなかった」という英語や英語学習に対する否定的な感情を理由に挙げた学生が数名いた。英語が苦手もしくは英語力が高くない学生にとってはこのような形式での自主学習は取組むこと自体がかなりの負担であると言える。Web 学習の内容や学習支援方法を工夫することも必要であろうが，取組みの有無によって成績に影響があるわけでなく，当面，目先の授業や実習に追われている現状を考慮すると，一人で勉強できる基礎的な英語力と外部からの強制力がない限り，Web 学習による英語の自主学習は効果があまり期待できないと考えられる。

【「Web 学習システムによる自主学習」のまとめ】

- 自主的に取組んだ学生は全体の 27.2%であり，英語運用能力の向上に対する効果についても非常に弱い肯定的評価に留まった。
- 課題としては，Web 学習の内容や学習支援方法を工夫することが挙げられるが，学生は授業や実習に追われて時間的な余裕がないこと，一人で勉強できる基礎的な英語力がない学生も多いこと，自主学習は外部からの強制力がないこと等を考慮すると，Web 学習による英語の自主学習は効果があまり期待できないと考えられる。

（4）英語カフェの活用（2，3 年生）

１）実施内容

本学に既設の英語カフェの活用方法について紹介し，自主的な利用を奨励した。英語カフェとは，月曜から金曜日の通常 10:40 から 16:50 の時間帯に外国人講師もしくは本学の専任教員（日本人を含む）が 1 人常駐しているスペースのことで，英会話を楽しんだり英語の DVD を視聴したり洋書を読んだりして英語の環境に浸ることができる。ハロウィーン等のイベントでは飾り付けや仮装コンテストも実施している。

２）アンケート調査の結果と考察

自主的に取組んだ学生は全体の 18.4%にあたる 19 名（2 年生 10 名，3 年生 9 名）で回数は 1~10 回（平均回数は 1.3 回）であり，複数回利用した学生は 3 年生の 6 名のみであった。英語運用能力の向上に効果があったかを 5 件法（1：全くそう思わない，2：そう思わない，3：どちらともいえない，4：そう思う，5：とてもそう思う）で尋ねたところ（表 13），M= 3.32 (SD= 0.98)であり，「効果があった」とまでは思っていないことになる。自由記述の回答の中には「外国人講師の先生と会話をして楽しかった」という肯定的な回答も見られたが，「たまたま空きコマに行ったときの先生が控えめな先生で沈黙が多く気まずかった」という回答もあり，外国人講師の性格や学生との相性も効果に影響を与えたようである。

また，全く取組まなかった理由を尋ねたところ，Web 学習の項目での回答と同様に「時間がなかった」が 43 名と最も多かったが，Web 学習と異なる点は英語カフェでは外国人講師が在室している時間帯に都合をつけることが難しかったことが挙げられる。そして，Web 学習の項目での回答と類似しているが，「英語が苦手なので行く勇気がなかった」「英語しか話せないと思うと行きづらい」という回答が 16 名あった。Web 学習は個人で行うものであり受容技能（リスニングとリーディング）のみを扱うが，英語カフェは相手と関わる必要がある上に発信技能であるスピーキングが必要となるので，英語に対して苦手意識をもっている学生にとっては Web 学習以上に取組みにくかったと言える。英語カフェの位置づけとしては，後述する模擬留学や海外教育語学研修に参加して英語でコミュニケーションをしたいという意欲をかきたてられた学生がフォローアップとして活用するというケースが最も多いと考えられる。

【「英語カフェ」のまとめ】

- 自主的に取組んだ学生は全体の 18.4%であり，積極的に取組んだ一部の学生には好評であったが，英語運用能力の向上に対する効果についても非常に弱い肯定的評価に留まった。
- 課題としては，Web 学習と同様に内容や学習支援方法を工夫することが挙げられる。英語カフェでは外国人講師と英語で話さなければならないので，スピーキングに不安を感じている学生には非常に取組みにくく，模擬留学や海外教育語学研修に参加して英語でコミュニケーションをしたいという意欲をかきたてられた学生がフォローアップとして活用するという位置づけが最も妥当であると考えられる。

（５）模擬留学（2，3 年生）

１）実施内容

8 月 5，6 日に参加希望学生 21 名と外国人講師 4 名と学科専任教員 1 名の合計 26 名で 1 泊 2 日の英語合宿を実施した。不参加者 81 名に参加しなかった理由を尋ねたところ，最も多かったのは「予定が合わなかった」（58 名）であった。また，「経済的な理由のため」という回答が数名いたが，講師派遣費用や会場使用料は事業予算からの支出であり，学生の自己負担は食費と交通費のみであった。なお，「模擬留学」という呼称を用いてはいるが，英語を話すことに抵抗がある学生が大半を占めることを考慮し，「小学校英語に役立つ英語合宿」というテーマで，将来小学校で英語を教えるときに活かせる活動を中心にプログラム内

容を作成した。また，外国人講師の主体性を尊重するとともに当日の運営を円滑にするために，外国人講師との事前打ち合わせを１回行って外国人講師からのアイデアも取り入れた。そして，グループ活動（講師１名，学生 5～6 名）を効果的に取り入れ，親密なコミュニケーションと個人指導の充実を図りながら次のような活動を行った。

【メイン活動】・発音演習，クラスルーム・イングリッシュ演習
・英語で小学校１年生の算数の授業体験（児童役・先生役）
・英語絵本の読み聞かせと内容についてのディスカッション
・「ももたろう」のオリジナル・スキットの作成と発表
・「サダコと折鶴」の英語紙芝居演習
・広島紹介の英語 DVD 鑑賞と広島についての Q&A
・ALT とのティームティーチング演習

【ミニ活動】・フォニックス・アルファベット・ジングル
・英語の歌（振付あり）
・英語でクイズ
・英語 DVD の鑑賞（Glee）

実際のスケジュールは次の通りである。

8 月 5 日（水）		8 月 6 日（木）原爆の日	
9:00	準備開始	6:30	起床
10:00	参加者・外国人講師集合完了	6:30～7:00	洗面
10:00～10:30	開会式，オリエンテーション	7:00～8:00	朝食，布団の片付け
10:30～12:00（90 分）	活動①自己紹介，発音演習，クラスルームイングリッシュ演習	8:00	外国人講師集合
12:00～1:00	昼食	8:00～9:30（90 分）	活動⑤平和への祈り：「サダコと折鶴」の英語紙芝居演習（8:16　原爆投下の黙とう）
1:00～2:30（90 分）	活動②英語で小学校の算数の授業体験	9:30 ～ 10:00（30 分）	活動⑥広島を英語で紹介（広島，呉，尾道，福山，しまなみ海道等）
2:30～3:00（30 分）	Fun Time①フォニックス・アルファベット・ジングル		
3:00～3:30	休憩（Tea Break）	10:00 ～ 10:30（30 分）	Fun Time③英語の歌（振付あり）
3:30～5:00（90 分）	活動③英語絵本ワークショップ 1（絵本でディスカッション）	10:30～11:00	休憩（Tea Break）
5:00～5:30	Fun Time②英語でクイズ	11:00～12:00（60 分）	活動⑦ALT とのティームティーチング演習
5:30～7:00（90 分）	活動④英語絵本ワークショップ. 2（読み聞かせと「ももたろう」のスキットの作成）	12:00～1:00	昼食
7:00	外国人講師帰宅	1:00～2:30	活動⑧スキットの発表
7:00～8:00	夕食	2:30～3:00	閉会式，アンケート，掃除
8:00～9:00	洋画 DVD（Glee）鑑賞	3:00	外国人講師帰宅，解散
9:00～11:30	入浴，スキット練習，自由時間	3:30	点検後，鍵の引き渡し
11:30	就寝		

２）アンケート調査の結果と考察

合宿の最後に 5 件法（1：全くそう思わない，2：そう思わない，3：どちらともいえない，4：そう思う，5：とてもそう思う）で回答するアンケート調査を行った結果を表 6 に示す。すべての項目において非常に高い肯定的評価であり，英語合宿が楽しいものであり（項目 1：$M = 4.90$, $SD = 0.29$），英語学習に対する意欲の向上に役立った（項目 5：$M = 4.78$, $SD = 0.43$）ことがわかる。個々の活動についても総じて高い肯定的評価であり，特に評価が高かったのは絵本の読み聞かせ（項目 6：$M = 4.81$, $SD = 0.39$），英語の歌（項目 11：$M = 4.81$, $SD = 0.39$），発音演習（項目 1：$M = 4.71$, $SD = 0.55$）であった。約半年後の年度末に実施した事後アンケートにおいても模擬留学の評価は高く，表 13 の英語運用能力の向上に効果があったかについての 5 件法での回答（$M = 4.28$, $SD = 0.73$）だけでなく，表 14 の「小学校英語教育に対する意識の向上に効果があった」（$M = 4.56$, $SD = 0.68$），「小学校英語教育に対する知識の向上に効果があった」（$M = 4.44$, $SD = 0.68$），「小学校英語教育に対する技能の向上に効果があった」（$M = 4.39$, $SD = 0.76$）についても高い評価であった。

表６．模擬留学のアンケート調査の結果の平均と標準偏差

Part 1　全体的な感想		*M*	*SD*
1	模擬留学は楽しかった。	4.90	0.29
2	模擬留学で英語力が向上したと思う。	4.33	0.78
3	模擬留学で英語に対する自信がついたと思う。	4.33	0.56
4	模擬留学で英語に対する不安が減少したと思う。	4.48	0.59
5	模擬留学でもっと英語を勉強したいと思った。	4.78	0.43
6	模擬留学の機会があればまた参加したい。	4.67	0.64
Part 2　個々の活動の評価			
1	発音演習	4.71	0.55
2	クラスルーム・イングリッシュ演習	4.43	0.66
3	英語で算数の授業体験	4.67	0.47
4	フォニックス・アルファベット・ジングル	4.48	0.66
5	絵本ワークショップ（ディスカッション）	4.67	0.56
6	絵本ワークショップ（読み聞かせ）	4.81	0.39
7	絵本ワークショップ（ももたろうのスキットの製作）	4.38	0.72
8	英語のクイズ	4.33	0.71
9	平和への祈り（「サダコと折鶴」の紙芝居演習）	4.52	0.59
10	広島紹介 DVD と Q&A	4.24	0.75
11	英語の歌（振付あり）	4.81	0.39
12	ALT とのティームティーチング演習	4.48	0.59
13	スキットの発表	4.52	0.66

【自由記述の回答例】　　＜意識＞＜知識＞＜技能＞は筆者による分類

・行くまでは，英語が苦手なので不安な気持ちでいっぱいでしたが，本当に 2 日間楽しくて，英語を話すことに対して恥ずかしいという気持ちがなくなりました。何とか伝えようという気持ちにもなったし，何とか聞き取りたい，もっと英語を勉強したいと思いました。今までは「受験で必要だから」とか，「教師になったら必要だから勉強しなきゃ」という気持ちでしたが，今は「英語を勉強したいな！コミュニケーションがとれるようになりたいな」と思います。正直，自分がこんな気持ちになるとは思ってもみなかったので，自分に驚いています。＜意識＞
・楽しく英語に触れたことで英語に対する苦手意識が減少しました。英語を話そうとトライすることの大切さや，英語を子どもたちに教えるときのポイントなど，幅広く英語について学ぶことができてとてもためになりました。とにかく楽しかったです。＜意識＞＜知識＞
・初めは本当に不安でした。英語が苦手で話せるかわからず不安なまま始まりました。先生たちの英語を一生懸命聞き取ろうと頑張りました。すると先生たちはわかりやすい英語で話してくれました。私は単語や文法が間違っていたらどうしようと思ってなかなか話せませんでしたが，それよりも会話をする，コミュニケーションを取ろうと積極的になることが大切だと教えてもらいました。1 泊 2 日でより多くの英語に触れ，会話が何度か続けられたのでとても自信になりました。何よりも楽しめたので良かったです。＜意識＞＜技能＞
・普段の勉強よりも楽しみながら実践的な英語が身につくと思った。＜技能＞
・私は英語に対してとても苦手意識をもっていました。なので，今回の英語合宿に不安を抱えていたのですが，先生方がとても明るく優しいので私でも楽しむことができました。＜意識＞
・外国人講師の先生にしっかり見てもらえてよかった（特に発音）。小学校の先生になって活かせることばかりだった。＜知識＞＜技能＞
・絵本の読み聞かせでは 4 人の先生のコーナーを回って体験したので，いろんな人のいろいろな教え方を知ることができてとてもためになった。英語の楽しさ，良さを知ることができた。＜知識＞

自由記述の回答例から，英語が苦手な学生でも楽しく参加でき効果を感じられた主な要因として，外国人講師がフレンドリーで話しやすい上に学生一人ひとりと密なコミュニケーションが取れるような学習形態であったこと，小学校の英語の授業で役立つ実践的な内容の活動を数多く取り入れたことが挙げられる。これらは前述の Web 学習や英語カフェでは取り入れることが難しかった事柄でもあり，小学校英語教育のための教員養成や教員研修の内容を考える際に重要な視点となると考えられる。

【「模擬留学」のまとめ】

・成果としては，小学校英語教育に対する意識，知識，技能のすべての面の効果について非常に高い肯定的評価を得た。
・英語が苦手な学生でも楽しく参加でき効果を感じられた主な要因として，外国人講師がフレンドリーであったこと，学生一人ひとりと密なコミュニケーションが取れるような学習形態であったこと，小学校の英語の授業で役立つ実践的な内容の活動を数多く取り入れたことが挙げられる。
・今後継続する場合の課題としては，外国人講師の質，個人指導が可能な参加人数，学生の負担にならない程度の参加費用，小学校英語に役立つ活動内容が挙げられる。

（6）海外教育語学研修（1～3 年生）

1）実施内容

平成 28 年 1 月 31 日～3 月 1 日の約 1 か月間，カナダのビクトリア大学における研修に学生 29 名（1 年生 26 名，3 年生 3 名）と引率教員 1 名が参加した。第 2 回目となる今回の研修費用は 50 万円であり，偶然ではあるが本調査研究事業の対象学生（小学校コースの 2，3 年生）の参加者はなかった。研修の効果を最大限にするために後期に「海外教育語学研修事前演習」（担当は学科専任教員）を週 1 コマの授業として実施しており，効果を測定するために TOEIC®模試トレを 12 月に事前テストとして，3 月に事後テストとして実施した。

本研修では，約 1 か月間カナダのビクトリアでホームステイしながら，午前中はビクトリア大学にて英語の授業を受け，午後は様々な異文化体験や教育関連の活動に参加した。児童教育に特化した内容として，4 回の児童教育に関する講義・ワークショップと 4 回の教育関連施設（託児所，公立小学校，モンテッソーリ学校，高等学校）の訪問があり，訪問の際には現地教員との質疑応答や児童・生徒との交流の時間が設けられ，日本文化についてのプレゼンテーションを行った。研修の具体的な日程は次の通りである。

月日	午前	午後	月日	午前	午後
1/31（日）	広島空港→羽田→成田→バンクーバー→ビクトリア		15（月）	英語の授業	カーリング体験
2/1（月）	英語の授業	オリエンテーション	16（火）	英語の授業	Montessori School 訪問
2（火）	英語の授業	教育講義①	17（水）	英語の授業	文化交流
3（水）	英語の授業	Downtown walking tour	18（木）	英語の授業	初等教育講義④
4（木）	英語の授業	幼児教育講義②	19（金）	英語の授業	博物館見学，ホッケー観戦
5（金）	英語の授業	州議事堂見学	20（土）	ホストファミリーと過ごす	
6（土）	ホストファミリーと過ごす		21（日）	High Tea（オプション）	
7（日）	ホストファミリーと過ごす		22（月）	英語の授業	クレイダーロック城見学
8（月）	州の Family Day のため休み		23（火）	英語の授業	Campus View 小学校訪問
9（火）	英語の授業	託児所訪問，オペラ鑑賞	24（水）	英語の授業	Free afternoon
10（水）	英語の授業	高校訪問	25（木）	英語の授業	学校訪問とカナダ教育の総括
11（木）	英語の授業	幼児教育講義③	26（金）	英語の授業	Farewell lunch，修了式
12（金）	英語の授業	Goldstream Park 見学	27（土）	ビクトリア→バンクーバー（観光）	
13（土）	ホストファミリーと過ごす		28（日）	バンクーバー→成田（日付変更線通過）	
14（日）	ホストファミリーと過ごす		29（月）	成田到着後，後泊	
			3/1（火）	成田→羽田→広島空港	

2）アンケート調査の結果と考察

海外教育語学研修の効果について 5 件法（1：全くそう思わない，2：そう思わない，3：どちらともいえない，4：そう思う，5：とてもそう思う）で尋ねたアンケート調査の結果を表 7 に示す。英語力の向上については，リスニング力（項目 1-1：M = 4.17, SD = 0.75）とスピーキング力（項目 1-2：M = 4.24, SD = 0.62）に対する評価が高いが，情意面についての評価はさらに高く，「英語が完全にはわからなくても何とかやっていけると思えるようになった」（項目 4：M = 4.66, SD = 0.54），「英語を勉強する意欲が増した」（項目 7：M = 4.66, SD = 0.48），「英語が前よりも好きになった」（項目 2：M = 4.62, SD = 0.49），「英語でコミュニケーションしたいという意欲が増した」（項目 6：M = 4.62, SD = 0.55），は最も高い評価であった。これは，昨年度の海外研修に参加した学生へのアンケート結果（表 14）において，「小学校英語教育に対する意識の向上に効果があった」（M = 4.56, SD = 0.68)），「知識の向上に効果があった」（M = 4.44, SD = 0.68），「技能の向上に効果があった」（M = 4.39, SD = 0.76）の順に評価が高かったことと類似している。1 か月という短期間の研修のため，英語力の大幅な向上は期待できないにしても，実際に現地で様々な異文化体験を英語で行ったことは学生たちの情意面に多大な影響を与えたと言える。英語が得意とまでは言えなくとも，少なくとも英語が嫌いではない教員の養成において，一定期間の海外での生活・研修が絶大な意義を有していることは明らかである。

表 7．海外教育語学研修の効果の平均と標準偏差

		M	*SD*
1	英語力が向上した。	3.93	0.64
	1-1 リスニング力が向上した。	4.17	0.75
	1-2 スピーキング力が向上した。	4.24	0.62
	1-3 リーディング力が向上した。	3.34	0.54
	1-4 ライティング力が向上した。	3.66	0.48
	1-5 語彙力が向上した。	3.76	0.68
	1-6 文法力が向上した。	3.69	0.46
2	英語が前よりも好きになった。	4.62	0.49
3	英語に対する不安が減少した。	4.17	0.75
4	英語が完全にはわからなくても何とかやっていけると思えるようになった。	4.66	0.54
5	英語に対する自信がついた。	4.03	0.67
6	英語でコミュニケーションしたいという意欲が増した。	4.62	0.55
7	英語を勉強する意欲が増した。	4.66	0.48

海外教育語学研修の効果をさらに詳細に分析するために，事後の TOEIC®模試トレを受験して点数がわかった直後に実施したアンケート調査の自由記述の回答例を示す。

【自由記述の回答例】

【英語の 4 技能別に海外研修の効果があったと思うこと】

①リスニング

・事前と事後の TOEIC®模試トレのリスニングの点数は同じだったが，前は曖昧なまま解答してい

たのがちゃんと理解して解答を導けたと思う。（類似の回答多数）
・単語単語が英文の中から聞き取れるようになった気がする。点数には効果が表れなかったが，自分の耳は確実に英語慣れすることができたと思う。（類似の回答多数）
・前回の TOEIC®模試トレの受験時と比べて単語を聞き取りやすかったり，聞き取りながら内容を理解できるようになったと思う。（類似の回答多数）
・英語で話している意味を理解するのが速くなった。（類似の回答多数）
②リーディング
・事前の TOEIC®模試トレよりも時間内に読むことができるようになっていた。時間が足りず適当に解答することが少なくなった。（類似の回答多数）
・自分に必要な情報だけを瞬時に読み取ることがもっとできるようになった。
③スピーキング
・文法が全然だめでも単語だけでもとにかく伝えようとすれば伝わることがわかった。
・研修に行く前より頭で考えて話し始めるスピードが速くなった。
・日本語を英語にして喋るのではなく，英語が頭に浮かぶようになった。
・自分から話していく力がついたと思う。また，話していてどう言ったら伝わるかがよくわかった。
・自分から積極的に話しかけるなどメンタル面での成長や，発音も気を付けるようになった。
・単語で話していたが，きちんと文を作って話せるようになった。
・初めの頃よりも流暢に話すことができるようになった。
④ライティング
・以前より英語で文章を書くことへの抵抗感が薄くなった。
・英文を作ることが好きになった。
・スペルがすらすら出てくるようになり，書くのが速くなった。
・いかに簡単な英単語と文法を使うかということを頭に置いているとわかりやすい文章が書けるようになった。

以上の回答例から，TOEIC®模試トレの点数に表れなくても 4 技能のそれぞれにおいて学生が英語力の向上を実感できていることがわかる。すなわち，英語がはっきりと以前より速く聞き取れるようになるとともに，以前より速く必要な情報を読み取れるようになったり，自分から積極的に以前より流暢に話せるようになったり，英文を書く抵抗感がなくなり以前より速く書けるようになったりしたという達成感である。英語の検定試験の点数がアップすること以上に，このような達成感を得ることが自律した学習者を育成する上では重要であり，1 か月という短期間で達成感を感じるまでに至る点では，海外研修は最も効果の高い方法であると考えられる。

【「海外教育語学研修」のまとめ】

・成果としては，TOEIC®模試トレの点数は微増しただけに留まったが，点数に表れなくても 4 技能のそれぞれにおいて学生自身が英語力の向上を実感でき，達成感を感じていた。
・小学校英語教育に対する意識，知識，技能のすべての面の効果において高い肯定的評価が得られただけでなく，1 か月の異文化体験は非常に貴重な経験となった。
・課題としては，なるべく多くの学生が参加できるような参加費用の設定が挙げられる。

（７）TOEIC®模擬テストの実施（事後テスト）

１）実施内容

TOEIC®模試トレ（サイバーユニバーシティ株式会社）を 2，3 年生を対象として翌年 1 月に 2 回目の実施をした。また，海外教育語学研修参加者を対象として 12 月（事前テスト）と 3 月（事後テスト）に実施した。このテストは，前述したようにリスニング（100 点）とリーディング（100 点）の問題合計 50 問（200 点）を 50 分間でウェブ上で解答する TOEIC の模擬テストであり，TOEIC®予測スコア（学生には合計点のみ表示）の相関係数は 0.87 である。2 回目の受験後も学生の感想として，各問題の解答制限時間が決まっており，パソコンの画面上に解答時間が減っていくのが表示され，制限時間が終了すると解答していなくても次の問題に進んでしまうため，特にリーディングにおいて自分のペースで解答できなかったり，ストレスを感じたりするという声が多数聞かれた。

２）結果と考察

調査研究対象者の中から欠席者やデータに欠損のあった者を除き，2 年生 50 名と 3 年生 53 名，海外教育語学研修参加者 29 名の結果を表８，図６～図９に示す。2 年生，3 年生ともにリスニングとリーディングの得点と合計点のいずれにおいても事前・事後の平均点は微増したのみでほとんど変化がなかった。また，海外教育語学研修参加者についてもリーディングよりリスニングの方がやや伸びていたと言える程度でほとんど変化がなかった。ただし，個々の学生の事前と事後の得点がほとんど同じだったというわけではなく，事後の方が 100 点以上伸びていた学生の数は，2 年生が 5 名（最大値は 195 点），3 年生が 6 名（最大値は 140 点），海外教育語学研修参加者が 1 名（110 点）であり，反対に 100 点以上下がっていた学生の数は，2 年生が 4 名（最大値は 190 点），3 年生が 6 名（最大値は 160 点），海外教育語学研修参加者が 2 名（最大値は 130 点）であった。テストの信頼性にも関連するが，オンラインでパソコンで解答することは正規の TOEIC とは異なる受験環境であり，学生によってはそのことにより精神的にマイナスの影響を受けている者もいるように思われる。

当初の予想としては，2 年生はリーディングの授業を受講しているので特にリーディングが伸び，3 年生は英語の授業がないので合計点が下がり，海外教育語学研修参加者はリスニングが大幅に伸びるものと想定していた。しかし，そうはならずに平均点はほとんど変化がなかったことから，本調査研究事業で行った取組を TOEIC®模試トレで評価する妥当性がもともと低かったとも考えられる。実際に，①～⑥の取組は直接的に TOEIC の得点アップをめざして実施したものではなく，学生自身が求めているものもまずは小学校で英語を教えるために必要な英語力（例えば，発音とスピーキング力）であり，TOEIC の高得点ではない。TOEIC はあくまでも一般的な英語運用能力のうちのリスニングとリーディングの技能を測定するテストであり[6], 小学校での英語教育指導者の養成においては小学校で英語を教えるために必要な英語力に特化した英語熟達度テスト（特にスピーキングテスト）を開発して活用すべきであり，その方が学生にとっても英語学習の動機づけの一つになると考えられる。

[6] TOEIC を運営している国際ビジネスコミュニケーション協会はホームページにおいて、「Listening と Reading という受動的な能力を客観的に測定することにより、Speaking と Writing という能動的な能力までも含めた英語によるコミュニケーション能力を総合的に評価できるように設計されている」と述べているが、直接的には Listening と Reading しか測定していない。

表８．TOEIC®模試トレの平均点

	2 年生			3 年生			海外教育語学研修参加者		
	ﾘｽﾆﾝｸﾞ	ﾘｰﾃﾞｨﾝｸﾞ	合計	ﾘｽﾆﾝｸﾞ	ﾘｰﾃﾞｨﾝｸﾞ	合計	ﾘｽﾆﾝｸﾞ	ﾘｰﾃﾞｨﾝｸﾞ	合計
事前	206	198	404	208	203	411	219	213	432
事後	208	201	409	209	205	414	229	218	448
差	＋2	＋3	＋5	＋1	＋2	＋3	＋10	＋5	＋16

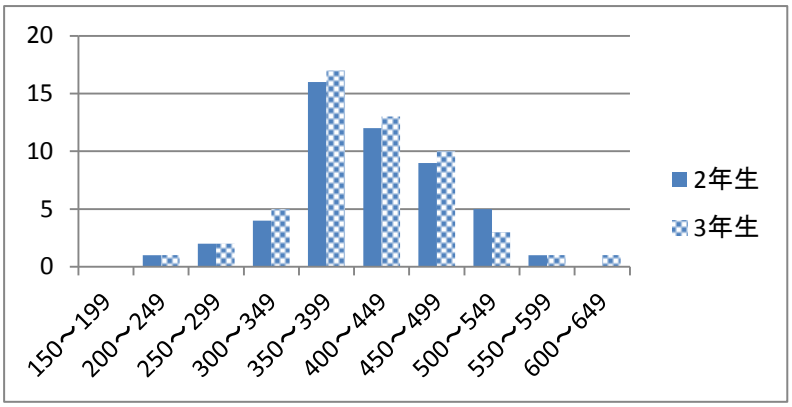

図６．TOEIC®模試トレの得点分布（事後テスト）

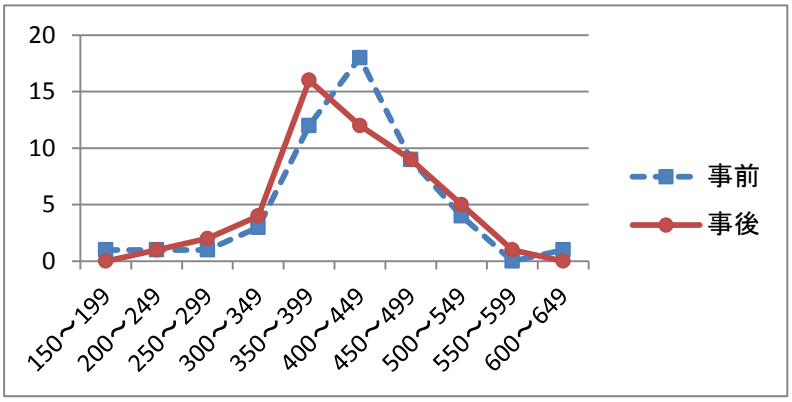

図７．TOEIC®模試トレの２年生の得点分布（事前・事後）

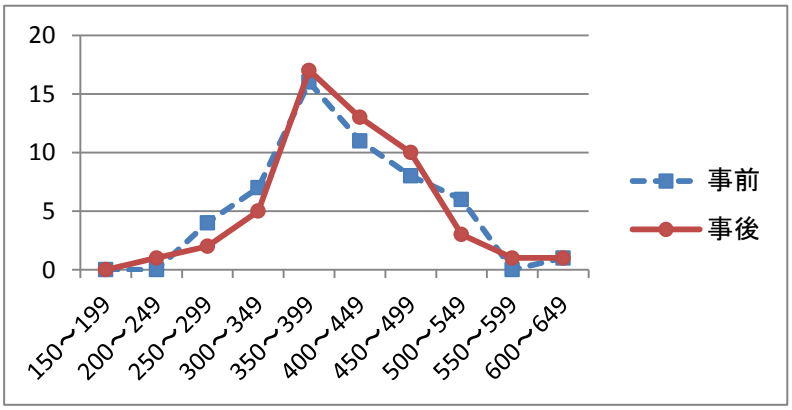

図８．TOEIC®模試トレの３年生の得点分布（事前・事後）

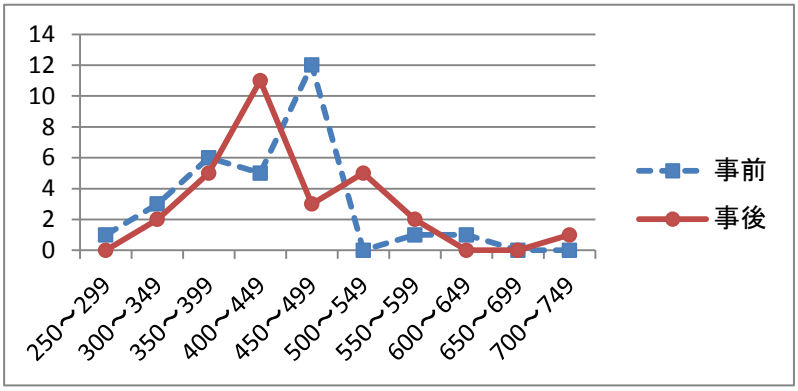

図９．TOEIC®模試トレの海外教育語学研修参加者の得点分布（事前・事後）

【「TOEIC®模擬テストの実施」のまとめ】

- 成果としては，2 年生，3 年生，海外教育語学研修参加者のいずれにおいても平均点は微増しただけで，ほとんど変化はなかった。しかし，個々の学生の変化を調べてみると 100～200 点もアップまたはダウンした学生がそれぞれ 1 割程度存在していた。
- 課題としては，TOEIC®模試トレや TOEIC はあくまでも一般的な英語運用能力のうちのリスニングとリーディングの技能を測定するテストであり，本調査研究事業での成果を測定する妥当性が十分ではなかったと考えられる。
- 小学校での英語教育指導者の養成においては小学校で英語を教えるために必要な英語力に特化した英語熟達度テスト（特にスピーキングテスト）を開発して活用すべきであり，その方が学生にとっても英語学習の動機づけの一つになる。

（８）事後アンケート調査の実施

１）実施内容

事前調査の内容に加えて，①～⑥の全取組の効果を調査するために 5 件法（1：全くそう思わない，2：そう思わない，3：どちらともいえない，4：そう思う，5：とてもそう思う）で回答するアンケート調査を翌年 1 月に実施し，情意面・態度面の変容を分析した。

２）結果と考察

A．英語に関する意識調査

①英語に対する印象（事前調査，事後調査）

英語が好きかどうかを 5 件法で尋ねた評定値の平均は，2 年生はやや否定的な評価，3 年生はやや肯定的な評価のままで 2，3 年生ともにほとんど変化がなかった（表９）。

表９．英語に対する印象の平均と標準偏差

	2 年生(n = 50)		3 年生(n = 53)		全体(n = 103)	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
事前調査	2.96	0.98	3.30	1.09	3.14	1.05
事後調査	2.96	1.11	3.25	1.27	3.10	1.20

②英語に対する不安（事前調査，事後調査）

英語に対する不安について 5 件法で尋ねた事前調査と事後調査の評定値の平均は，2，3 年生ともにほとんど変化がなかった（表 10）。さらに分析したところ，「とても不安」と「少し不安」をあわせた人数は 2 年生で 5 名，3 年生で 2 名減少しており，全体に対する割合も 92.2%から 85.4%に減少しており，わずかではあるが英語に対する不安が減少したことは本調査研究事業の成果である。

表 10. 英語に対する不安の平均と標準偏差

	2 年生(n = 50)		3 年生(n = 53)		全体(n = 103)	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
事前調査	4.38	0.82	4.47	0.60	4.42	0.72
事後調査	4.24	0.86	4.44	0.74	4.34	0.81

B．外国語活動に関する意識調査（事前調査，事後調査）

①外国語活動に対する印象

項目 1～3 の「外国語活動の目標・目的の理解」，「指導内容の理解」，「外国語活動の必要性」のすべてにおいて事後調査の方が高い評定値となったが，「児童英語教育法」を初めて履修した 2 年生において特にその傾向が強い（表 11）。これらは本調査研究事業の取組の成果の一つである。

表 11. 【外国語活動に対する印象】の評定値の平均

	2 年生(n = 50)		3 年生(n = 53)	
	事前	事後	事前	事後
1 小学校外国語活動の目標・目的の理解	2.70	3.76	3.36	3.42
2 小学校外国語活動における指導内容の理解	2.18	3.52	2.77	3.10
3 小学校における外国語活動の必要性	4.20	4.48	4.04	4.15
4 小学校で外国語活動を担当することの不安	4.22	4.48	4.38	4.31
5 小学校で外国語活動を担当することの楽しみ	3.14	3.02	2.91	3.13
6 小学校で外国語活動を担当したくない気持ち	2.80	3.28	3.04	2.87

また，項目 4 の「外国語活動を担当することへの不安」は事前・事後調査ともに最も高い評定値であり，2 年生は増加，3 年生は微減している。この不安について，事前と事後で変化があったかについて自由記述で尋ねたところ，回答例から個々の学生の不安の多様な内容が明らかになった。外国語活動に関する知識を得ることで不安が増加する場合と減少する場合があるが，いずれにせよ模擬授業や母校実習で実践を積むことにより不安は減少していくと考えられ，また，減少しないとしても漠然とした不安から具体的な不安へと質的に変化することによって解決方法が見つけやすくなると考えられる。

【自由記述の回答例】

【外国語活動を担当することへの不安が増えた】
・いろいろ学んだからこそ，自分に足りない力が多いと実感したから不安が増えた。(2 年生)
・正しい発音を知れば知るほど難しく感じ，自分にできるか不安の強さが増えていった。(2 年生)
・英語関係の授業がなくなり英語を聞くことや読むことがなくなったから。(3 年生)
・教員への道が近くなってきたから。(3 年生)
【外国語活動を担当することへの不安が減った】
・英語を教える教師に必要な能力が分かったので見通しがもてた。(2 年生)
・ネイティブのような英語でなくても良いとわかったから不安が減った。(2 年生)
・発音のしかたを教えてもらったので不安が減った。(2 年生)
・「児童英語教育法」で，とにかく楽しんで授業をすることがわかり少し安心した。(2 年生)
・「児童英語教育法演習」で模擬授業を行ったことで展開の仕方が見えてきたから。(3 年生)
・母校実習で外国語活動の授業を行ったことがあるため。学校の授業でも模擬授業を行ったことがあったのでどのように授業を進めればよいかイメージできるから。(3 年生)
【外国語活動を担当することへの不安の質が変わった】
・以前はただ不安だと漠然と感じていたが，教師が習得しておくべき能力が分かったので不安の内容も「その力をどのように習得したらいいか」など具体的になったと感じる。(3 年生)

②外国語活動の実践に必要な能力や資質

事前調査と傾向は変わらず，事後調査においても最も高い評価項目は 2，3 年生に共通して，スピーキング力（項目 4)，正しく発音できる力（項目 5)，教員のコミュニケーション能力や態度（項目 7）であった（表 12)。事後調査では，それらの項目と並んで ALT との協力（項目 10）が高く評価されていたが，外国語活動の授業について具体的・実践的に学んだためだと考えられる。

表 12.【外国語活動の実践に必要な能力や資質】の評定値の平均（事前，事後）

		2 年生(n = 50)		3 年生(n = 53)	
		事前	事後	事前	事後
1	教員のリーディング力	4.54	4.18	4.04	4.08
2	教員のリスニング力	4.66	4.58	4.34	4.35
3	教員のライティング力	4.44	4.02	4.02	3.77
4	教員のスピーキング力	4.84	4.86	4.79	4.79
5	教員の正しく発音できる力	4.82	4.80	4.85	4.69
6	教員の語彙力	4.44	4.38	4.60	4.33
7	教員のコミュニケーション能力や態度	4.84	4.92	4.79	4.83
8	教員の異文化に対する理解や知識	4.44	4.58	4.55	4.52
9	教員の早期英語教育に関する知識	4.36	4.38	4.21	4.29
10	ALT（外国語指導助手）との協力	4.60	4.84	4.53	4.71
11	中学校（の英語授業）との連携・協力	4.14	4.36	4.11	4.21

C．①～⑥の取組が英語運用能力の向上に効果があったか

それぞれの取組が一般的な英語運用能力の向上に効果があったかを 5 件法（1：全くそう思わない，2：そう思わない，3：どちらともいえない，4：そう思う，5：とてもそう思う）で尋ねたアンケート調査の結果を表 13 に示す。肯定的評価となったのは，英語カフェ（3 年生のみ），模擬留学，海外教育語学研修であり，かなりの量の実際の英語使用の機会が確保できない限り，一般的な英語運用能力の向上は感じられないと言える。

表 13. 英語運用能力の向上に対する効果の評定値の平均と標準偏差

		2 年生		3 年生		全体	
		M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
1	専門教育科目の履修						
	①「児童英語教育法演習」（3 年生）	－	－	3.77	0.82	－	－
	②「児童英語教育法」（2 年生）	3.98	0.62	－	－	－	－
2	「英語リーディング」の履修（2 年生）	3.84	0.76	－	－	－	－
3	Web 学習システムによる自主学習	3.38	1.05	3.33	1.11	3.36	1.08
4	英語カフェの活用	2.70	0.64	4.00	0.82	3.32	0.98
5	模擬留学	4.25	0.43	4.29	0.80	4.28	0.73
6	海外教育語学研修（昨年度）	4.50	0.50	4.80	0.40	4.75	0.43

D．①～⑥の取組が小学校英語教育に関する意識，知識，技能の向上に効果があったか

それぞれの取組が小学校英語教育に関する意識（考え，意欲・関心など），知識（英語教育法，外国語活動指導法など），技能（授業力，英語運用能力など）の向上に効果があったかを，5 件法（1：全くそう思わない，2：そう思わない，3：どちらともいえない，4：そう思う，5：とてもそう思う）で尋ねたアンケート調査の結果を表 14 に示す。

表 14. 小学校英語教育に関する意識（考え，意欲・関心など），知識（英語教育法，外国語活動指導法など），技能（授業力，英語運用能力など）の向上に対する効果の平均と標準偏差

		意識の向上		知識の向上		技能の向上	
		M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
1	専門教育科目の履修						
	①「児童英語教育法演習」（3 年生）	4.42	0.69	4.23	0.70	3.79	0.88
	②「児童英語教育法」（2 年生）	4.26	0.56	4.18	0.62	3.74	0.77
2	「英語リーディングⅠ・Ⅱ」の履修	3.66	0.79	3.70	0.85	3.62	0.87
3	Web 学習システムによる自主学習	3.36	0.67	3.25	0.74	3.36	0.77
4	英語カフェの活用	3.21	0.83	2.95	0.89	3.37	0.98
5	模擬留学	4.56	0.68	4.44	0.68	4.39	0.76
6	海外教育語学研修（昨年度）	4.92	0.28	4.75	0.60	4.58	0.86

「児童英語教育法演習」と「児童英語教育法」は小学校英語教育を扱う授業であるためそれに関する意識と知識の向上に効果があったのは当然とも言えるが，半期という時間的制約からも技能を十分に扱う余裕はなく，今後も技能の向上までは期待できないと考えられる。また，「英語リーディングⅠ・Ⅱ」，Web 学習システムによる自主学習，英語カフェの 3 つの取組が肯定的評価には及ばなかった最大の原因は，学生が小学校英語教育とのかかわりを見いだせなかったからである。小学校英語と関連する内容で，空きコマがない状況でも取組む時間を保証し，適切な学習支援の手立てを講じることによって効果のあるものに改善することができるであろう。模擬留学と海外教育語学研修については，小学校英語教育に関する意識，知識，技能のすべての面において高い肯定的評価となったが，単に外国人講師またはカナダ現地の人々と実際に英語を使って豊富な経験をすることができたからではなく，小学校英語教育に関する実践的な内容を数多く取り入れたからこそ，その効果が相乗的に高まったと考えられる。

【「事後アンケート調査」のまとめ】

- 英語が好きか嫌いかについては，事前と事後で 2，3 年生ともにほとんど変化がなかった。
- 英語に対する不安については，事前と事後で 2，3 年生ともにわずかに減少した。
- 外国語活動に対する意識については，「児童英語教育法演習」と「児童英語教育法」の授業を通して，目標・目的の理解，指導内容の理解，外国語活動の必要性の評定値が上がった。
- 外国語活動を担当することの不安は事前，事後ともに最も高い評定値であったが，不安の内容の変化はさまざまであり，外国語活動に関する知識を得ることで不安が増加する場合と減少する場合があるが，いずれにせよ模擬授業や母校実習で実践を積むことにより不安は減少していくと考えられ，また，減少しないとしても漠然とした不安から具体的な不安へと質的に変化することによって解決方法が見つけやすくなると考えられる。
- 外国語活動の実践に必要な能力や資質については，事前調査と傾向は変わらず，最も高い評価項目は 2，3 年生に共通して，スピーキング力，正しく発音できる力，教員のコミュニケーション能力や態度であり，事後調査では ALT との協力が並んで高い評定値を得た。
- 各取組が一般的な英語運用能力の向上に効果があったかについては，肯定的評価となったのは，英語カフェ（3 年生のみ），模擬留学，海外教育語学研修であった。
- 各取組が小学校英語教育に関する意識（考え，意欲・関心など），知識（英語教育法，外国語活動指導法など），技能（授業力，英語運用能力など）の向上に効果があったかについては，「児童英語教育法演習」と「児童英語教育法」は意識と知識の面で肯定的評価となった。模擬留学と海外教育語学研修については，意識，知識，技能のすべての面において高い肯定的評価となったが，小学校英語教育に関連する実践的な内容について実際にネイティブ・スピーカーと英語を使う機会を豊富にもったからである。

（9）先進的な英語教育を実践している小学校の視察

小学校英語教育に関する学校現場のニーズを把握し，平成 32 年度改訂予定の学習指導要領の内容を先取りする取組から学ぶために，広島県内で先進的な英語教育を実践している小学校を視察した。視察候補校としては，平成 22 年度から特区として小学校高学年において教科「英語科」

を週 2 単位時間実施している広島市立小学校と，平成 26 年度から平成 29 年度までの 4 年間文部科学省から英語教育強化地域拠点事業に指定されている東広島市立東西条小学校と東広島市立御薗宇小学校が挙がったが，日程等の諸事情により後者の 2 校のみを視察した。

①東広島市立東西条小学校

12 月 7 日に 2 名で視察し，授業参観の後，英語教育強化地域拠点事業連絡協議会に同席した。授業参観では学級担任による 6 年生対象の単独授業を参観した。校長の話によると，英語が苦手な担任であったが，ALT とのティーム・ティーチングではなく単独での授業でも徐々にではあるが英語を多用することができるようになったとのことで，学級担任としての先進的な英語教育への取組を参観することができた。連絡協議会では構成員である小学校 2 校，中学校 1 校，高等学校 1 校，指導助言者として広島県および東広島市教育委員会指導主事と広島大学教員の間で活発な意見交換が行われ，地域や教育委員会，大学との連携の一端を視察することができた。

②東広島市立御薗宇小学校

12 月 11 日に 2 名で視察し，授業参観の後，校長，教頭，英語教育担当者と意見交換を行った。授業参観では，5 年生の担任と ALT とのティームティーチングの授業を参観した。フラッシュカード等を有効に活用し，ストーリー性を持った展開によって子どもたちの英語による活発な学習活動が見られた。授業参観後の意見交換では，英語教育の具体的な推進方法や課題について話し合った。校長を中心に英語教育担当主任を置き，カリキュラムや教材の開発，英語研修などを全校体制で推進している様子を視察することができた。

（10）研究報告会への参加

①「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」シンポジウム―英語教育コア・カリキュラムの策定に向けて―[7]

平成 28 年 2 月 27 日に文部科学省で開催されたシンポジウムに 1 名が参加し，本調査研究事業が置かれている英語教育改革の方向性と英語教育コア・カリキュラムの試案を把握することができた。当日発表された小学校外国語活動・外国語教育担当の教員養成に基本的に必要な「教職に関する科目」（2 単位程度以上），「教科に関する科目」（2 単位以上）のコア・カリキュラム（試案）の概要は次の通りである。

●「教職に関する科目」（2 単位程度以上）
◆目標：外国語活動・教科外国語の授業を実践するための指導力を身につける。
◆学習項目：①現在の小学校外国語教育についての知識・理解
②子どもの第二言語習得についての知識・理解
③授業実践
④模擬授業
●「教科に関する科目」（2 単位程度以上）
◆目標：外国語活動・教科外国語の授業内容の背景などとなる専門的な知識・技能などを修得し英語運用能力を身につける。

[7] http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/sympo/

◆学習項目：①英語コミュニケーション
②英語運用能力に必要な基本的な知識等
（1）英語の基本的な音声の仕組み
（2）音声・語彙・文法の基本的な知識
（3）発音と綴りの関係
（4）第二言語習得理論の基礎
（5）マザーグース・絵本・児童文学
（6）様々な国・地域の生活・習慣
（7）異文化交流

これらの中で「教科に関する科目」の①の英語コミュニケーション以外は，本調査研究事業で報告した「児童英語教育法」と「児童英語教育法演習」において扱っている内容である。試案によると①の英語コミュニケーションは，小学校での授業実践に必要な英語力を 4 技能バランスよく身につけることを目的としており，平易な英語表現を十分正確に運用したり，分かりやすい発音やイントネーションで会話したり，相手意識を持って話したり書いたりする経験を通して伝わった自信を持たせることが重要であるとしている。したがって，共通教育科目の中の外国語科目として開講されている「英語コミュニケーション」を小学校英語に特化させた ESP（English for Specific Purposes）の役割を果たすものであると考えられ，これを「教科に関する科目」の中で扱うことは非常に意義が高いと言える。ただし，2 単位程度履修しただけですぐに身につく技能ではない上に，日常生活で英語を使う機会がないため授業で触れることがなくなれば忘れてしまうと思われるので，自律した学習者として授業後も継続して技能を保持していくことができるような仕組みが必要である。

Ⅴ．まとめ

各取組のまとめは個別に行ってきたので，調査研究課題である「小学校での英語教育に対応できる英語運用能力育成のためのカリキュラム開発」についての全体的なまとめとして，次の 4 点を挙げる。ただし，これら 4 点は本調査研究対象者のように英語のレベルが TOEIC400 点前半[8]で，将来は学級担任として外国語活動を担当するケースを前提としており，例えば TOEIC で 600 点以上得点できるようなケースや英語の専科教員をめざしているようなケースは事情が異なる場合もある。

１．学生の英語に対しての否定的な感情を取り除き，英語に興味関心を持たせることを最優先する。

小学校教員養成課程には，英語に対して否定的な感情（例えば，嫌い，不安である等）を抱いている学生が相当数存在することを前提として英語力の育成方法を検討すべきであり，中学校や高等学校の英語教員養成におけるアプローチ（例えば，TOEIC 等の英語検定試験の点数を目標の一つとする等）とは出発点が異なることを最初に銘記すべきである。したがって，ま

[8] TOEIC ではコミュニケーション能力のレベルを A～E の 5 段階に分けており，400 点前半は D レベル（220～465 点：通常会話で最低限のコミュニケーションができる）に相当する。C レベル（470～725 点：日常生活のニーズを充足し，限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる）になれば D レベルとは違った前提が想定できると考えられる。

ずは英語に興味関心をもたせ，不安を取り除くような工夫を凝らした授業や課外活動を経験させることが重要である。現職の教員研修においても教師の英語に対する不安の軽減をめざした研修の開発・実践の報告[9]があるほどであり，大学時代に英語に対する否定的な気持ちを取り除くことの意義は大きい。

２．「発音」「スピーキング」を中心に，小学校英語に役立つような実践的な内容を扱いながら英語運用能力を高める。

小学校教員養成課程の学生は「子どもにとって楽しい授業にしたい」という思いが強いので，一般英語の内容を扱いながら英語運用能力を育成するよりは，授業に役立つような具体的・実践的な内容を扱いながら英語力を育成していく方が英語学習の動機づけにもなり，学生の満足度も高いと考えられる。その際のキーワードは「発音」「スピーキング」である。

３．英語運用能力の測定や評価のためには TOEIC よりもスピーキングのある英検の方が適しており，理想的には小学校英語に特化した ESP のスピーキングテストを開発・活用することが望ましい。

２から必然的に言えることとして，小学校での英語教育に対応できる英語力の熟達度を測定・評価するためには小学校英語教育に特化した ESP のスピーキングテストを開発して活用することが望ましく，そうすることによって到達目標を学生に提示することができ，英語学習の動機づけにもつながる。また，既存の英語の検定試験で代用するならばスピーキングテストのない TOEIC よりも 2 次試験で必ずスピーキングテストが課される英検の方が適している。小学校英語教育に必要なレベルを考慮すると，必須条件として英検準 2 級，可能であれば 2 級合格レベルの英語力をイメージすることが妥当であると考えられる。

４．英語合宿や海外研修等を通して英語を使ってコミュニケーションする楽しさを実感することは非常に重要であるが，同時に，大学 4 年間を通して継続して英語に触れることができるように授業と行事を配置する必要がある。

英語合宿や海外研修は非常に効果が高い方法であり，実際に英語を使ってコミュニケーションを図ることの楽しさを実感し,成功体験を得ることは何物にも代えがたいと言える。しかし，一過性の行事としての性質上，その効果を継続させるための工夫が必要であり，理想的にはカリキュラム上，大学 4 年間を通じて授業の形態で途切れることなく継続して英語と関わることができれば最も確実に英語運用能力を育成することができると考えられる。具体的には，共通教育科目の英語科目と専門教育科目の英語関連科目をうまく配置して，その要所要所に英語でのパフォーマンス大会，英語合宿，海外研修等の行事や，英語スピーキングテスト，英検等の一般的な検定試験を経験させることにより，学生は達成感を得ながらメタ認知を働かせて自ら自律的な学習者として英語学習を継続していくことができる。そのような自律的な学習者を育てることこそ，英語を教えることのできる小学校教員を育成することに他ならない。

---

9 町田智久，内田浩樹．(2015).「教師の外国語不安の軽減を目指した教員研修の開発」．*JES Journal, 15*:34-49.